

1 1 ATP 若手映画プロジェクト第 1 回支援作品

ファルージャ

イラク戦争 日本人人質事件…そして

2004 年 4 月、3 人の日本人がここで人質となった
3 日以内に自衛隊を撤退させなければ人質は殺す
日本政府は撤退を拒否 9 日後に解放された 3 人を待っていたのは
政府関係者、一部のメディア、国民からのバッシングだった
「人質となったのは彼らの自己責任だ」
…その後、彼らはどんなふうに生きて来たのだろうか？



出演：高遠菜穂子 今井紀明

監督：伊藤めぐみ

プロデューサー：広瀬涼二

撮影：伊藤寛、大月啓介、大原勢司 編集：伊藤誠

音楽：吉田みさお 音響効果：早船麻季 HP ポスターデザイン：小川梨乃

宣伝：カプリコンフィルム 配給：有限会社ホームルーム

製作・著作：有限会社ホームルーム、一般社団法人全日本テレビ番組製作社連盟

<http://fallujah-movie.com> 2013/日本/カラー/HD/95分

【劇場情報】

2013 年 12 月 7 日～2014 年 1 月 10 日：新宿バルト 9・広島バルト 11、横浜ブルク 13、梅田ブルク 7、T・ジョイ京都、T・ジョイ博多にて、各地 1 週間限定上映

1 月 25 日（土）～3 月 28 日（金）：渋谷・アップリンク

2 月 8 日（土）～ 2 月 28 日（金）：名古屋・シネマスコーレ

4 月 5 日（土）～4 月 17 日（木）：北海道・シアターキノ

4 月 12 日（土）～5 月 2 日（金）：大阪・第七藝術劇場

5 月 10 日（土）～5 月 23 日（金）：神戸・元町映画館

5 月 17 日（土）～5 月 23 日（金）：富山・フォルツァ総曲輪

配給お問い合わせ：有限会社ホームルーム 03-5369-3637 tv@homeroom-doc.com（担当：西岡）

宣伝お問い合わせ：カプリコン・フィルム 090-7270-0423 iwai@kapricornfilm.net（担当：岩井）

「ＡＴＰ若手映画プロジェクト」について

今、テレビ業界で働く人数は１万人を超えると云われている。しかし、若手のクリエイターたちに、自由闊達な表現と発表の場が与えられているかと問われれば、否、と答えざるを得ない。一般社団法人全日本テレビ番組製作社連盟(略称 ＡＴＰ)は、若手クリエイターの育成事業の一環として、２０１２年度より「ＡＴＰ若手映画プロジェクト」を発足させた。

ＡＴＰは、製作資金の支援を含め、劇場公開・回収の機会を提供し、また製作母体となる制作プロダクションは権利を獲得、コンテンツを国内外に向けて自由に発信する事が出来る。このことにより、若手クリエイターたちに夢と希望を与え、ひいては業界全体の活性化を図る、というのがこのプロジェクトの目的である。

若手クリエイターとは企画採択時３５歳までとし、ＡＴＰの加盟社(現在１２４社)に広く企画を募集した。ノミネートされた企画の中で、審査委員全員一致で選ばれたのが、今回の『ファルージャ』である。監督は伊藤めぐみさん、２８歳。ＡＤ経験はあるもののディレクター経験なし、まさに初監督。プロデューサーは数々の名作ドキュメンタリーを創ってきた広瀬涼二氏。

イラク戦争が舞台だがく生きるとは何か＞という根源的なテーマに迫り、心にトゲが刺さるドキュメンタリー映画が完成した。

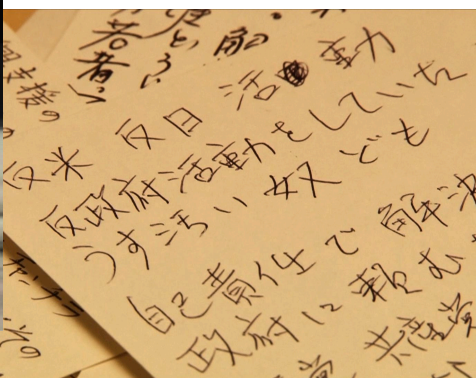
(文責 若手映画プロジェクト座長 山口秀矢 理事)

映画概要

《テレビでは観られない タブーに挑んだ！！》

2004 年、イラク戦争「日本人質事件」の当事者の現在を捉えたドキュメンタリー

イラク戦争から１０年。当時、日本国内でバッシングが吹き荒れた「日本人質事件」のことを覚えているだろうか？イラク支援のために行った日本人３人。しかし、ファルージャで地元の武装グループによって日本政府へ自衛隊撤退を要求するための人質として拘束された。当時、日本政府はアメリカが始めたイラク戦争を支持。「人道復興支援」のためとして、イラクに自衛隊を派遣していた。日本政府は自衛隊撤退を拒否。日本では３人の行為が国に迷惑をかけたとして「自己責任」を問われ、また同時に事件そのものとは関係のない誹謗、中傷も行われていた。この映画は、はからずも人質となった、高遠菜穂子さん、今井紀明さんの現在の姿を追うことで日本社会の問題点、そして未だ戦火の止むことのないイラク、ファルージャの生々しい現実を捉える。



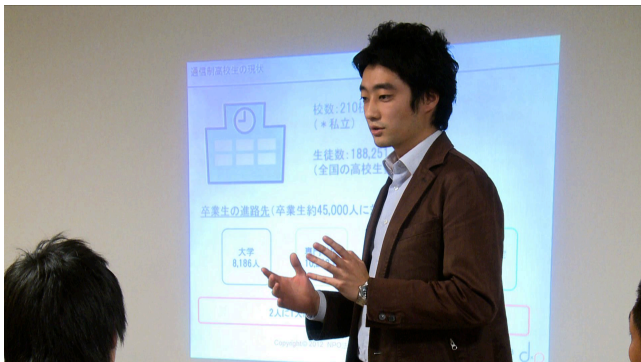
先天異常児、国内紛争—まだ戦争が終わっていない国イラク…そしてそれぞれのその後

高遠菜穂子さんは、事件後の PTSD を乗り越え再びイラク支援を続けていた。NGO などの団体に加わるのではなく、1人でイラクに通い支援と調査を行っている。イラクでの先天異常児は戦争以後、今も増え続けているのが実態だ。またファルージャで撮影中にも、現政府と対立する宗派の抗争も発生していた。そこにはまだ平和とは言い難いイラクの現実があった。



一方、人質事件のもう1人、今井紀明さんは5年の間、対人恐怖症に苦しんだ。現在は、大阪で不登校や、ひきこもり経験のある通信制高校の若者を支援するNPOの代表をしているという。社会から拒否された存在に、昔の自分をみて何かできないかと思ったという。

それぞれにとってあの戦争、あの事件が引き起こした問題は未だ終わっていない。



日本に住むわたしがなぜイラク戦争を考えるのか？

監督はイラク戦争当時、高校生だった伊藤めぐみ。現在、テレビ番組制作会社でADとして働く28歳。当時、イラク反戦のデモに行ったりと、10年前に起きたイラク戦争は、世の中に対して何かしたいと思う1つの出発点だった。しかしあのイラク人質事件の報道を見る中で、何か人と違った意見を言うことを「怖い」と感じるようになっていた。

今回、一般社団法人全日本テレビ番組製作社連盟（略称 ATP）の ATP 若手映画プロジェクトにこの企画を応募。採用され、本映画が制作されることになった。

「戦争を止めたい、何かしたいと思った私は変わり者？」「遠くの世界の出来事に感じてしまう『戦争』をどう考えればいいの？」この映画は、監督自身のナレーションによって今の若者にそれを問いかける。

【出演者プロフィール】

高遠菜穂子さん

1970 年北海道千歳市出身。大学卒業後、会社勤めなどをしていたが、30 歳を機にタイやインドのマザーテレサの家でボランティアを始める。現在もイラク支援を続け、日本とヨルダンを拠点にし、短期でイラクに滞在しながら個人で医療支援などを行っている。

今井紀明さん

1985 年北海道札幌市出身。高校生の頃からフリーライターとして記事を書き、NGO の代表もつとめていた。現在は NPO 法人「D×P」の共同代表を務める。通信制高校に通う若者を対象に中退防止のための授業を行っている。

【監督プロフィール】

伊藤めぐみ

1985 年三重県出身

2011 年 4 月、テレビ番組制作会社（有）ホームルーム入社

NHK『にっぽん釣りの旅』『アジアで花咲け！なでしこたち』でアシスタントとして制作に携わる。

「今回が初めての演出作品です。撮影中、「なぜ私はここまで他人の人生に踏み込むのか」、「私が今この撮影をする意味は何だろう」と考え込んでしまうことが何度もありました。でも高遠さんや今井さんは、それぞれの「今」を見せてくれました。メディアに出ることで再び批判されることを覚悟しながら…

2 人を撮影しながらも、この映画を作るということは、私にとってのイラク戦争、そして人質事件で感じた疑問を解くための 10 年越しの挑戦だったのかもしれません。」



【ホームルームと広瀬凉二】

有限会社ホームルーム（HR）は2001年、広瀬が（株）ドキュメンタリージャパン（DJ）を辞めて、設立したプロダクションです。それまでの20年間、広瀬はDJ設立者であった河村治彦氏亡き後、他2人の共同代表（山崎裕氏、橋本佳子氏）と共に、数多くのテレビドキュメンタリーを制作して来ました。そしてホームルーム設立12年目の今年、初めて映画の制作を手がけました。

【広瀬凉二の仕事歴】

☆フリー・ディレクターとして

- 1963年 （株）日経映画社（現、日経映像）入社、企業PR映画の制作助手
- 1970年 万博会場用の記録映画の脚本、監督の後、同社退社、フリーとなる
- 1973年～1980年 フジテレビ「世界の舞台裏」、日本テレビ「遠くへ行きたい」、日本テレビ「明日の世界と日本」などテレビの仕事始める
- 1981年～2001年 DJ設立に参加、1985年から共同代表
- 1982年 日本テレビ「父と娘は国境を超えた」〈民放祭優秀賞〉
- 1983年～1993年頃まで 毎日放送「地球発22時」、TBS「新世界紀行」、日本テレビ「タイム21」など
- 1993年 NHKスペシャル「あなたの声が聞きたい」CO-D 永井祐子〈ATP 郵政大臣賞〉〈文化庁芸術作品賞〉〈NHK 会長特賞〉

☆プロデューサーとして

- 1995年 NHK BS「青春法廷」D 毛利匡〈放送文化基金本賞〉〈ギャラクシー選奨〉
- 1997年 NHK BS「ジャーニーオブホープ」D 坂上香〈文化庁芸術作品賞〉〈ATP 優秀賞〉
NHK BS「わたしはハボン」D 永井祐子〈ギャラクシー奨励賞〉
- 1998年 NHKスペシャル「なぜ隣人を殺したか」D 五十嵐久美子〈イタリア賞グランプリ〉
〈地方の時代審査員推奨〉〈NHK 会長特賞〉

☆1999年 個人賞 放送文化基金放送文化賞

☆2001年 NHK ETV「女性戦犯法廷問題」をきっかけにDJを退社
同年10月、（有）ホームルームを設立

☆ホームルームとして、民放各局の番組を企画制作。2年後からNHKも復帰

テレビ朝日「宇宙船地球号」、テレビ東京「ガイアの夜明け」。NHK「わが心の旅」など

2010年 NHK「総合診療医ドクターG BSシリーズ シーズン1」

2011年 NHK BS「長江大紀行」D 竹内亮、「ドクターG シーズン2」地上波、総合へ

2012年 NHKスペシャル「水玉の女王 草間弥生」D 松本貴子〈ギャラクシー選奨〉

2013年 NHK「総合診療医 ドクターG シーズン4」CO-P 永井祐子

【プロデューサーから】

「自己責任」ってなんですか？

この映画を観てくださる方に私が問いかけたいのは、その一言です。

2004年4月、開戦から1年が過ぎたイラク戦争の激戦地ファルージャで人質となった三人の日本人を苦しめてきたのが「自己責任」という言葉でした。

イラク戦争は2001年に起きたいわゆる9・11事件に逆上したブッシュと米国が反米イスラム勢力への報復として一方的に仕掛けたものでした。それは「大義なき戦争」といわれ国際的に非難を浴び、日本の世論も反対が多数を占めていました。

しかし当時の小泉政権は開戦を支持し、米軍と同盟軍（英国など）の後方支援と現地の人道支援をするため自衛隊を派遣したのです。

ファルージャのイラク武装勢力が人質解放の条件としたのが、「自衛隊の撤退」でした。日本政府は即座にその要求を拒否しました。三人の釈放か処刑か、期限が迫る中で、政府関係者から発せられたのが「激戦地へ出かけていった三人の自己責任だ。」という声でした。それがメディアに採り上げられ、ネットを通じてヘイトスピーチのような悪意に満ちたバッシングとなっていったのです。

三人は彼らを支援するNGOやイラクの宗教指導者の尽力で釈放され帰国しました。しかし日本で彼らを待ち受けていたのは「国益を損ない世間を騒がせた自己責任をとれ」という非難の嵐でした。

そして9年後私は映画「ファルージャ」をつくりました。それはテレビドキュメンタリーの現場で40年間仕事をしてきた私自身への「自己責任」と思ったからです。自己責任とは誰かに問われるものではなく、「私は自分らしく生きているか？」と自らに問うことだと思うのです。

2013年10月

ホームルーム プロデューサー 広瀬涼二

【イラク戦争・イラク人質事件 年表】

2003年	3月20日	イラク戦争開戦
	4月 9日	首都バグダッド陥落
	5月 1日	ブッシュ大統領 「大規模戦闘終結宣言」
	12月 9日	日本 自衛隊のイラク派遣の基本計画を閣議決定
2004年	1月	自衛隊本隊派遣
	4月 上旬	米軍による一度目のファルージャ掃討作戦
	4月 7日	イラク人武装勢力がファルージャ近郊で日本人3人を拘束
	4月 8日	アルジャジーラが武装勢力の自衛隊撤退を求める声明文を放送 日本政府は自衛隊の撤退拒否を表明
	4月 10日	武装勢力が3人を解放する趣旨の声明文を発表
	4月 15日	人質3人が解放される
	11月 上旬	米軍による二度目のファルージャ掃討作戦
2006年	5月20日	イラク正式政府発足（マリキ政権・シーア派）
	12月30日	サダム・フセイン元大統領 死刑執行
2009年	2月14日	自衛隊完全撤退
2010年	8月31日	オバマ大統領 「戦闘終結宣言」
2011年	12月18日	米軍完全撤退

【イラク・ファルージャ】

首都バグダッドより西に約70kmに位置する、イラク中部の都市。古代メソポタミア文明を育んだユーフラテス川が流れる。敬虔なイスラム教スンニ派信徒が多い。

イラク戦争では反米闘争の拠点になっているとみなされ、多数の犠牲者を出した。特に、2004年11月に行われた米軍による掃討作戦では、6000人以上の死者を出したとされる。

【著名人からのコメント】

●澤地久枝（作家）

イラクの首都バグダッドから70キロの街ファルージャ。

2004年4月、三人の日本人が拘束され、日本国内で「自己責任」を問う声が起きた。

イラク攻撃の理由、大量破壊兵器は発見できず、アメリカは撤退する。

ファルージャでは二分脊椎など、障害を持った子が生まれ、命は数時間で終る。

高遠さんは一人でファルージャへ入り、戦争がまさに今進行している現実を報じようとしている。

その勇気に揺さぶられる思いがする。

ファルージャは意識の底で遠くなっているが、あの新生児たちの姿には頭をたれる。生きのびているすべての人間へのメッセージだと思う。

●大澤真幸（社会学者）

あの人質事件によってわれわれは思い知った。われわれ日本人は、〈正義〉についてのあらゆる思想をすでに失っている、と。こう痛感せざるをえなかったのは、「正義」の実現を目ざして失敗した三人に対するバッシングが、もうひとつの「正義」を立ち上げようとする格闘を通じて発せられたわけではなく、主としてルサンチマンの温床から出てきていたからだ。「ファルージャ」には、〈正義〉のこの不毛地帯から脱出しようとする必死の試みが撮られている。成功への保証をもたないそれらの挑戦に、胸が打たれる。

●安田純平（フリージャーナリスト）

自分ではない自分を批判され、期待されていたようで対人恐怖症になった—との今井さんの言葉には身につまされるものがある。やはりイラクで拘束された私も経験した感覚だからだ。人との関わりを通して自らの居場所と役割を見出し、自分を取り戻していく2人の姿を見て、私が今も続けている戦場取材はただおのれのプライドにこだわってきただけのものなのではないか、という気がして少し胸がざわついた。

●鈴木 邦男（一水会顧問）

政府は国民を守らない。イラクで人質になった３人に対し、「自己責任だ」と言って切り捨てた。国を守らない政府など、いらない。倒されるべきだ。ところが冷酷な政府を支持するマスコミがいた。愚かな国民もいた。そして、帰国した３人に猛然と襲いかかってきた。「死んだ方がよかった」と。もはや、「殺人国家」だ。国家的な狂気、暴走、ヒステリーは何故起きたのか。カメラは冷静に、真面目に、執念深く、この問題を追いかける。そして告発する。「国家的いじめ」に抵抗できなかった我々一人一人の＜責任＞も問う。考えさせられる映画だ。怖い映画だ。

●天木直人（元駐レバノン特命全権大使）

米国のイラク攻撃が行なわれてから１０年あまりがたち、日本だけがその検証をすることなく忘れ去ろうとしている。
在レバノン特命全権大使の職をかけてイラク戦争に反対した私としては残念でならない。
そんな思いの中で私はこの映画を鑑賞する機会に恵まれた。
これこそがあのイラク戦争を見事に検証した映画だ。作者に感謝したい。そして一人でも多くの国民に観てもらいたい。

●北田暁大（東京大学准教授）

自己責任という怖しく不気味で抑圧的な言葉が言論の場を覆いつくしたあの人質事件から１０年。当事者たちがその後向かい合ってきた現実を辿り直すことにより、イラク戦争が、現地の人々にとってはもちろん、元「人質」たちにとっても、そして自己責任論という暴力を生み出し続ける日本の社会にとっても、終わりを迎えていないことが丁寧に描き出される。開戦時高校生であった作り手による、歴史になりきることのない近過去と現在への鋭利な問題提起。

●是枝裕和（映画監督）

あの事件の「自己責任」を問われた人々のその後の人生における「責任」の取り方を追いながら、この作品は、あの戦争を支持し、加担した人々の未だ果たされぬ、世界に対しての「責任」を問い掛ける。

● サヘル・ローズ（タレント）

今の報道では語られなくなったイラク。

いや、当時ですら語られなかった現状。

そして人質三名の方々。

あのときは確かに私のまわりや、報道のあり方では『自己責任』だとか『本人たちが悪い』ような意志的な誘導を感じた。

この、ドキュメンタリーを通して感じた彼等の意思の強さやイラクへの思いは本物だと、遊び心じゃなくて。

そして高遠さんを通してみえる

アメリカが残した傷跡は痛々しく、癒えるどころか、あとから見えてくる次世代の子供たちへの脅威という刃は鋭く痛々しい。

映像は目をそらしたいものばかりですが…武器…ウラン。

このドキュメンタリーは

日本だけでなく

多くの国々でもみてもらいたい。

戦争は白旗をあげたら

終わりじゃなくて

続いている。

批判はかんたん。

けれど批判をするまえに

あらゆる角度からみてから否定なり批判をするべきだと思いました。

● 谷村志穂（作家）

若い監督、伊藤めぐみさんには、迷いが無い。

始まりから終わりまで、自分自身の確かな実感がある。

世界は平和ではないと実感するのは他人事で、実は一見平和に見えるこの国の中にこそ、

たくさんの矢が飛び交っているのだと怖いくらい感じる瞬間を経て、

人は本当に世界に出会うのだと思う。

●原一男（映画監督）

作品を見ながら、何度、嗚咽を堪えたことだろう。ここには、日本人として、いや、「ヒトとしての生き方」の原理が、痛く、鋭く、熱っぽく、示されている。

「イラクは、今も戦場だったー。」アメリカの化学兵器を使用した爆撃による、イラクの先天性異常の赤ん坊たちの映像が挿入されているが、名状しがたい激情に駆られる。絶句するしかない。まさに、ヒトが破壊された状態で、一応、この世に生を受けてくるのだが、生きていく力もなく、まもなく死んでいく。この世の生き地獄のような惨状をみて、この子たちのためになんとかできることをしよう、と、真っ当に考えることができるヒトこそ、真にヒトと呼べるのではないか。「日本が支持した戦争に、今も苦しんでいる。」そのイラクの人々に対して、真っ当なヒトとして支援の活動に励む高遠菜穂子さんが、不運にも人質事件に遭遇、解放されたあと、ニッポン人たちから激しいバッシングを受け、さすがに落ち込んで、死にたい、と口にしたとき、高遠さんの母親は、娘の頬をひっぱたいて、何をグジャグジャ言ってるン！ 早くイラクの人たちの元へ行って働くように、と励ましたという。このインタビューのくだりが、作品の中で最も激しく私の琴線に触れた。湧き出てくる涙をとどめることができなかった。娘の背中を押し出す母と、背中を押されて、再び戦場へととって返す娘と、真っ当なヒトとしての凜とした輝きを見た思いだった。それにしても、この人質事件を巡って寄せられたメッセージの賛否の比率が、批判500通、激励800通であったという事実を、私は始めて知り、驚いたのだが、これを報道したヒトが、批判のみを取り上げたことが原因で、ネット世論の暴走に火をつけ、集団ヒステリックによるパニックとでもいうべき「自己責任を問う」バッシングが熱に浮かされたようにこのクニを襲った。事実を報道するという原理原則を忘れた記者が、その時、何を考え、恣意的な選択をしたのかを知りたい想いに駆られたが、取材拒否をしたのだろうか、映画には登場しない。ともかく、マスコミが煽り、為政者たちが、ここぞとばかり、ヒトとしての良心を潰しにかかり、浅薄なコクミンが踊らされるこのクニに、恐怖すら感じてしまう。いや、そうではないのだ。凄まじいバッシングに打ちひしがれ、PTSDに苦しみながらも、懸命に立ち直り、なお激しくヒトとしての生き方を求め、イラクなど戦場に赴き、苦闘する高遠さん、フィールドこそこのクニに移したが、不登校や引きこもりに苦しむ若者たちを支援しようと活動する今井紀明さんの姿が私たちの魂を揺さぶり、励ましてくれている、と、そのことに想いを馳せるべきなのだろう。

この作品の監督である伊藤めぐみさんについても触れておきたい。「みんなが反対したら戦争を止められると本気で思っていた。」と高校生のときからイラクの子どもたちの支援の活動を始めたそうだが、この作品の全編にわたって醸しだしている緊張感は、自らが、ヒトとしていかに生きるべきかと息苦しいまでに問うていく真剣さのエネルギーの息づかいなのである。アメリカが大国エゴイズムむき出しで始めた戦争に追随するわがニッポン国の権力者。彼がイラクに自衛隊を送り込むという選択をしたことを受けて、伊藤さんは、これで、私も戦争に対して責任を負うことになった、というのが、この感性こそが、真にヒトであることの証ではないだろうか。

言わずもがなではあるが、ヒトとして生き方を問われているのは、観客である私たちである。汚濁と腐敗の膿と腐臭に充ち満ちたこの国の中で、真に、ヒトの生き方を問う「警世」という表現が値するドキュメンタリーに出会って、勇気を吹き込まれて心底、嬉しく思う。

●森達也（作家・映画監督・明治大学教授）

とても重要な作品だ。観ながら思います。辛いけれど思います。あのときに自己責任を叫んだ人たちは、イラク戦争に対して無関心だった自分でもある。その帰結として現在がある。今も多くの人が苦しんでいる。助けを求めている。全国民に観てほしい。そして思いだしてほしい。考えてほしい。

●鎌仲ひとみ（映画監督）

こんなにも献身的な女性を多くの日本人が誤解し、
激しく批判した。

こんなにも純粋な青年を歩いているだけで殴る人がいた。
ものすごく多くの日本人が中傷に満ちた手紙を送りつけた。
そのバッシングはいったいどこからやってきたのか？
メディアが作り出したのか、政府が企んだのか、その両方かもしれない。
しかし、何よりも2人は人質解放の後に待っていた
日本での過酷な現実に向き合い、生き延び、前に進んでいる。
イラク戦争から10年。事実をきちんと伝えるこの映画ができ
積年の誤解が解けることを
心からありがたくうれしいと思う。

●小野さやか（ドキュメンタリー作家）

「日本人質事件」と大騒ぎしたあの日、誰もが最良の不完全な選択をした。
自己責任の負える範囲で発言をした人、重すぎる責任を負った人、無関心な人。
その延長線に、人間が人間を破壊する、オマケのような現実がある。
監督・伊藤めぐみさんは、28歳でこの違和感を形にした。

スクリーン越しに対峙したのは、安全な国・日本にいる「私」だ。